

公開講座「人はなぜこんなに残酷になれるのだろうか —排除と排斥を考える—」(2)¹⁾

森 達也*¹・中村一成*²・山本かほり*³・松宮 朝*³

山本かほり（以下山）：後半司会を務めます、愛知県立大学の山本かほりと申します。どうぞよろしくお願いたします。それではですね、ちょっと質問の整理をしつつ、その間、中村一成さんの方からですね、今回のこの大きなテーマに関わって、一成さんから、ちょっと問題意識を語ってもらいたいと思います。どうぞよろしくお願いたします。

中村一成（以下中）：森さんの『A』は、90年代以降のこの社会の劣化を、オウム真理教を1つのキータームにして考える契機です。ここからは、この作品と森さんの話から感じたことについて語ってみます。換言すれば私の取材テーマであるレイシズムから90年代以降を素描したいと思います。

タイトルは「『敵』をつくり、求めて来た『くに』の現在」です。

まずは現在の話から入りたい。私は京都を拠点に取材してるんですけど、同じ京都でこういう事件が起きました。京都府宇治市に「ウトロ地区」という在日朝鮮人集落があります。100人ほどが住んでいるのですが、ここで昨年8月、22歳の青年が火を放つという事件が起きました。家屋7棟が全半焼、うち2軒には5人が住んでいた。ここから話を起こしたいと思います。

彼は2000年生まれ、拘置所でマスメディア各社の取材に応じ、放火の動機について「朝鮮人が嫌いだった」「恐怖を与えたかった」「ヤフコメ民をヒートアップさせたかった」などと語っています。彼はその前に名古屋の民団関連施設に火をつけ、ウトロの後には彼の地元である奈良の民団関連施設に火をつけていま

す。共通項は「韓国／朝鮮」動機としての偏見・差別を踏まえれば、これは差別的動機による犯罪、ヘイトクライムなのは確かでしょう。いま私が取り組んでいるのは、差別を犯罪にすること、新しい犯罪類型を作ることです。私は犯罪の厳罰化には反対ですけど、差別については本来犯罪とされるものが犯罪とされていない現状がある。そこを食い破りたいと思って、書き語っているのです。

一つの元凶は「レイシズム」です。簡単にいえば、特定の属性集団を措定し、「何をしてもいい」「どんな目に遭わせてもいい」と考える発想です。加害を正当化するこの「思想」は、戦前、朝鮮、台湾を植民地化し、大陸を侵略、虐殺、強姦、略奪をほしのままにした時代から「敗戦」を経てこの社会の地下に溜め込まれてきたのですが、そのレイシズムと歴史修正主義が顕在化していくのがまさにオウム事件との同時進行、それが私の体験した90年代でした。

ここでレイシズムを説明します。レイシズムとは人種主義、人種差別主義と訳されます。では人種差別とは？ これは「あらゆる形態の人種差別撤廃に関する国際条約」という国際条約が基本です。「『人種差別』とは、人種、皮膚の色、世系又は民族的若しくは種族的出身に基づくあらゆる区別、排除、制限又は優勢であって、政治的、経済的、社会的、文化的その他のあらゆる公的生活の分野における平等の立場での人権及び基本的自由を認識し、享有し又は行使することを妨げ又は害する目的又は効果を有するものをいう。」法律の文章なのでまどろっこしいですけども、人種や皮膚の色、それから社会的出身とか、民族的な違いなど極めて多種多様な「違い」を基にしているということ

です。

もう一步進めます。チュニジア出身のユダヤ人、アルベール・メンミの定義です。「人種差別主義（レイシズム）とは、現実の、あるいは架空の差異に、一般的、決定的な価値づけをすることであり、この価値づけは、告発者が自分の攻撃を正当化するために、被害者を犠牲にして、自分の利益のために行うものである」。ここで見てほしいのは現実の、あるいは架空の差異に、一般的、決定的な価値づけをすること、ということ。

肌の色が黒いからといって差別されるのではない、違いがあるから差別するのではなくて、差別するために違いを見つける。その違いに本質的な「価値づけをする」のがレイシズムとメンミは喝破した。この価値づけは、精神科医の宮地尚子さんが言う「加害の正当化」に似通っているのです。これは、このような動機が与えられると、人は他害を正当化する。あるいは、社会の敵をやっつけてやったというカタルシスさえ感じるといことです。敵だから、悪者だから、先にやられたから、脅威にさらされているから、野蛮だから、劣っているから、言うことを聞かないから、汚い・不潔だから、命令されたから、ですね。この敵だから、悪者だから、脅威にさらされているとかですね、まさにオウム真理教報道などで私が、現役の記者時代も見て来たものです。

「憎悪のピラミッド」っていう、アメリカの社会学で使われている図表があります。ヘイト暴力研究の第一人者で、米国の社会学者、ブライアン・レヴィンが図式化したものです。「先入観による行為」から「偏見による行為」、「差別行為」「暴力行為」、そして「ジェノサイド」とヘイト暴力は過激化していきます。だからこそ、少なからぬ国が二度の世界大戦への反省などから、差別の法規制を打ち立て、時代に合わせて法改定を重ねているのです。

レイシズムは植民地主義や奴隷制、戦争の資源です。誰かを人間ではない存在とする思想が「人道に対する罪」を可能にするのは当然です。だから国連は国際人権条約で一番早い1965年、人種差別撤廃条約を採択したし、1960年、ドイツの民衆扇動罪を皮切りに、欧州などではレイシズムの法的規制に乗り出しました。しかし日本はそれに対処せず、敗戦後のスタートにそれを利用しました。入管体制と天皇制です。克服の対象とすべきものを温存し、「新生国家」建設の背骨にしたのです。前者の対象である在日朝鮮人の

「二級市民」状態は、当事者とその支持者の運動で改善していきますが、「絶対悪」の温存は、90年代に反動として噴出してきます。

1991年、日本のネオナチ「国家社会主義者同盟」が発足します。ヒトラーの支持者たちです。1994年には国土法違反の容疑で京都の朝鮮総聯などが大規模な捜索を受けます。国土法違反、土地の取引で判子がないことを理由に、350人ほどの警察官が京都の朝鮮総聯とか関係各所に家宅捜索をかけたのですが、実はそんな法令違反の事実はなかった。当時、朝鮮民主主義人民共和国の核不拡散条約からの脱退という騒動がありました。当時、京都府警の本部長は公安警察の人間でした。捜索をして何かが出て来れば自分の手柄になると考えたようです。こうやって捜索をして、それが大規模に報道されることによって、ある種の怪物化、脅威、敵だという雰囲気醸成されていくのです。

歴史修正主義も90年代です。1995年1月17日、ガス室を否定する「論文」が文芸春秋社の『マルコポーロ』という雑誌に掲載されました。サイモン・ウィーゼンタール・センターというシオニズム団体の猛抗議でこの雑誌は廃刊に追い込まれるのですが、世界的に見ればウルトラ級の歴史改竄が、日本で出たということ。こうやって底が抜けていくわけです。

同じ95年、「維新政党・新風」という、排外主義政治団体が誕生する。社会にレイシズムと歴史改竄をばら撒くレイシストの結節点になっていくのです。

翌96年、「新しい歴史教科書をつくる会」が発足します。これは「日本軍慰安婦」の教科書記述に危機感を抱いた右派の逆襲でした。1980年代後半から、例えば韓国の民主化などアジアの政治的変動で軍事政権の枷が外れまして、日本政府に戦争の、要するに過去清算を求める裁判をおこしてくるようになります。それで91年、元慰安婦であった金学順（キム・ハクスン）さんという方が、実名と顔を晒して「性奴隷」としての被害を告発するわけですね。

これは「証言の時代」の契機と言われています。彼女以外にも、傷痕軍人、軍属や遺族、徴用工らが名乗りを上げます。それによって93年、今右派が目敵にしている河野談話が出ます。これは慰安所の設置や管理、「慰安婦」の移送について、天皇の軍隊の直接間接の関与を認めたものです。今も実はこれ、日本政府の公式見解です。だから第一次安倍政権の時に、強制連行はなかったと安倍さんが言ってアメリカから批

判を浴びて、当時のブッシュ大統領に対して謝ったという、相手を間違えた対応もあるわけです。97年には中学校向け歴史教科書全社に「慰安婦」の記述が入ることになりました。その流れに反発して出来たのがこの「新しい歴史教科書をつくる会」でした。97年には「日本会議」が設立されます。バックラッシュが起きてくるわけです。

ミサイル発射や核開発問題で朝鮮学校生への暴行、脅迫も多発します、『戦争論』の刊行が始まる。そして石原慎太郎の「三国人発言」が出ます。「三国人」という地震とかが起きた時に三国人が騒擾を起こすのでその時は自衛隊に出動してくださいという趣旨です。この前の年には、全身性の障害者に対して「あの人たちに人格はあるのかね。」という発言をしたヘイトスピーチのデパートみたいな人です。01年には「ババア」発言もありました。言いたくないですが、閉経した女性に生きている価値はないということを人の発言を引用する形で言った。選良が社会に向けていわゆるヘイトというものを発言していく。それによって社会が壊れていくのです。

そして2002年9月、拉致問題が発覚します。朝鮮学校への暴行脅迫多発、いちいち書いていませんけど、朝鮮学校生への暴行脅迫ってのはずっと続いているわけです。

ここで注目すべきは、メディア、それから選良によるヘイトスピーチです。石原慎太郎を「三国人発言」でクビにできなかったってことはやっぱりすごくその後に禍根を残したわけですね。南京大虐殺はなかったとかそういう発言をした閣僚っていうのが辞任に追い込まれるっていうのが、この時までにはあった。それが90年代以降、三国人発言も看過され、石原はその場に座り続けたってことです。そういう人たちの発言が社会に浸透していく。

もう一つはサブカルチャーです。社会学者の倉橋耕平さんが指摘するように、漫画やムックを通して荒唐無稽な歴史改竄や差別偏見が社会に流布されていく。加えてネットです。そこで学知、専門的な知見のない人が好き放題に話をして、それが、それまで積み上げられてきた学知、さっき森さんが言っていた史実としての虐殺が、「あったということ」と「なかったということ」で対等な二つの説になってしまうんですね。その流れが今に繋がってくるということです。

その先に今のヘイトクライム状況がある。差別的動機に基づく犯罪をそれとして裁く法律が日本にはな

い。犯罪に繋がる差別煽動を禁止する法整備すらなされていない。それは危険なことです。差別とそこにに基づく犯罪と闘う武器がないだけではありません。差別はたいしたことではない、社会的に禁止されるほどの大した問題ではないとのメッセージを発するのです。

度し難いことに「選良」にそれを煽り立てる者が少なくない。次世代の党という党の幹事長ですけど、この人外国人の生活保護は違憲であるとの判決が出たと投稿している。嘘です。後に彼は、違憲は間違いで、実は違法だったと再投稿していますけど、これも嘘です。この裁判では、生活保護法における国民に外国人が含まれるかどうかということが問われただけです。最高裁は窓口対応で生活保護を外国人に出すことは認めているのです。違法とは言ってません。差別をなくす義務を持つはずの政治家たちが煽って便乗している。これなぜか。これが支持されて、票が取れる世界になってきたからです。いよいよもって危険なレベルにいつている。

森さんもコメント寄せてますけど、もうすぐ『主戦場』という映像作品が再上映されます。「慰安婦問題」に関して、あったと言う人、なかったと言う人をフレーム内で対峙させていく、ユーチューブ的なコンテンツなんですけど、監督のミキ・デザキさんにインタビューした際、聞きました。「並べることによって彼らの主張に『場』を与えてしまうんじゃないか、そこに不安を感じなかったのか」と彼はこう言いました。「ドイツと日本は文脈が違います。(ドイツで)ホロコースト否定論を信じている者はとても少ない。対して日本は歴史修正主義がメインストリームです。だから主流に真っ向から反論し、ぶつかる必要がある。ホロコースト否定論者に場を与えない論理と意味はわかるけど、日本の現状は違う。日本の修正主義者は左派・リベラルとの歴史戦に完全に勝利していると思う。私はこの映画で、彼らがすでに持っているよりも大規模で、よい発言の場を与えたとは思いません。」と書いていたということです。要するに、国際的に見てかなりこういうレベルに来ているということです。元凶の一つは加害に向き合わなかったことです。

「好機」はあったのですが、この社会はそれをむぎむぎとドブに投げ棄てました。昭和天皇の戦争責任を問わず、天皇制も解体もしなかったこと。外登入管理体制を確立させ、旧植民地出身者から日本国籍を喪失させて、ほぼすべての社会保障、戦後補償から排除した。私のような立場で日本の歴史を見る者としては、

始まりに不正があったのです。かつて作家の高史明さんにインタビューした時、彼はこう言いました。「日本はあの時点で生き直しの機会を失った」と。彼の言葉は、A級戦犯に罪を押し付ける形で彼らを処刑して、「戦後」という時空を始めた欺瞞を指しています。その無責任が朝鮮戦争で復興を図る退廃に繋がったと。

敗戦の破局を経て現在に至るまで、この社会は反差別と反歴史否認の規範を打ち立てずにきました。その結果が90年代以降のバックラッシュです。それはオウム事件以降の流れと絡み合い、制御不能な濁流となりました。レイシズムの観点からみたその「結果」であり「途中経過」が、前述したウトロ地区の放火であり、昨年来頻発している差別的動機に基づく犯罪の数々です。

存在しなかったわけではないのです。1962年には法政二高の学園祭を訪れた神奈川の朝高生が法政二高の生徒にエアライフルの銃床で頭を砕かれて殺されました。拉致や核、ミサイルなど、「北朝鮮」を巡る問題が喧伝されるたびに朝鮮学校生への暴行、脅迫が繰り返されました。

1997年には、愛知県小牧市で、14歳の日系ブラジル人少年が日本人の少年グループに拉致され惨殺されました。翌98年、千葉の朝鮮会館で、宿直だった副委員長が殺害され、会館が放火された。ウトロの後も、東大阪市の民団施設にハンマーが投げ込まれ、今年4月にはコリア国際学園の敷地内で段ボールが燃やされる放火が起きています。ヘイトクライムだけでもまだまだあるのです。あと最近の傾向は集団行動ではないことです。流しというか、一匹狼的な人物が重大な犯行に及んでいる。台風や地震のたびにサイバースペース上には煽動が投稿される。私たちは1923年9月の前にいると言っても大げさではないのに、政府は実効的対策に踏み出さないので、沈黙の共謀といえます。

2000年代に入って早くも二十年が経過しました。「『道理』や『倫理』、『正義』が現状をこじ開ける力を持たない社会で、『書き』『語ること』」、これはどういうことなのかを思います。

私が尊敬する韓国の映画監督に、イ・チャンドン(『ペーパーミント・キャンディー』『オアシス』『シークレット・サンシャイン』)という人がいます。彼に幾度目かのインタビューをした際にいただいた言葉は私の指針です。芸術に何ができると思うかと聞いた私に

彼はいいました。「分かりません。でも芸術は、人を他者の痛みと共に感ずるよう促すことはできる。すべてはそこから始まる。他者の痛みへの想像力こそがあらゆる芸術、倫理の出発点なのです」。

私もここから出発したいと思います。この言葉に照らしても今は本当に反芸術的な世界ですけど、だからこそ「書き」「語って」いきたいと思っています。

山：お二人の話聞きながら、たくさんの話題ってどうか、議論したいことが出てきて、多分1年生の皆さんなんかは頭の中いっぱいかなと思って。何やってるんだみたいパンパンになっている状態だと思いますけど、でもそういうことも含めて、色々なことを考えてもらいたいなっていう風に思っています。

お二人の話聞きながら、今日この場が実現したのは、私、さっき一成さんずっとおっしゃっていましたが、私が朝鮮学校の様々な差別、特に高校無償化から朝鮮高校が排除されたということで裁判にずっとどっぷりと関わったこの10年間で。そこで一成さんとも出会ったんですね。で、一成さんから森さんを紹介してもらったと。確か、飲んでる場所で突然電話が始まり、森さんは今授業中だから後で電話します、みたいな不思議な状況の中で、非常にワイワイしたところで「はじめまして」の電話をしたのを覚えてますけども。そういう意味では私の問題意識とも随分重なりあいながら聞いてました。

森さんの『A』の話なんかは、中から外を見る、みたいな話をしていましたけれども、これ私も朝鮮学校に関わって、朝鮮民主主義人民共和国にも関わった、っていう中でやっぱり絶対に違う存在なんですけど、朝鮮学校の人と私は日本人ですから、全く違う存在なんですけど。でも、その立ち位置から、外を日本社会を見る、みたいな経験をこの10年間でできたなと思っています。

最後の共感、多分英語で言うと empathy です、sympathy じゃなくてね。empathy と可変性って問題と、2つの死刑とか『A』とか、オウムの問題とかと関わりながらいくと思います。

そこで会場から寄せられた質問をお二人にぶつけたと思うんですけど、ちょっとね、取捨がつかないぐらい学生から色々きて、学生に、「全員質問を書きなさい」って言ったのを後悔してるんですけど。それでも無理矢理まとめてみました。

で、1つはやっぱり『A』、オウムに関わることで

す。まず、森さんへの質問。シンプルだけど結構重たい質問だと思うんですけど、『A』というタイトルの意味は何ですか、っていうこと。

ちょっとまとめていきますね。さらに映画を撮りながら、オウムにたかっている（メディア）人たちを撮ってますよね、そういう人たちを森さんはどう見ていましたかというのが1点、まあ2つ目。

そしてこれも、いろんな人から来ているんですけど。オウムの人たちが善良な人たちだっていうのは映画を観れば分かります。でも、なぜ、オウムの人があのような事件を起こしたとお考えですか。もう一度考えてみたいということですよ。

さらに、あの事件を起こしたその、オウムという宗教団体の教祖である麻原さんも善良だと思われませんかというのが3つ目くらいになりますかね。今度は一成さんにも、今の質問は答えていただきたいんですけど、いったん、ここでいきましょうか。

森達也（以下森）：これね、1問だけで多分1時間喋らなきゃいけないんで、はしよるのもちょっとはしょれないんですよ。

まず答えられる質問からいきますね。『A』というタイトルの意味だけど、……意味ないです。BでもCでもいいんです。当時は、さっき言いましたね、テレビはオウムの特番だらけで、そのほとんどが「密着365日オウム真理教野望の帝国ついに崩壊」とか、長いタイトルがめちゃくちゃ多くてすごくあれが嫌で。タイトルなしにしたいって言ったんです、プロデューサーの安岡に。それに対して彼は顔をしかめながら、タイトルなかったら宣伝どころか興行もできないって、まあもっともですよ、それで僕としては仕方なく、ずっとオウムのイニシャルのAを仮タイトルで使っていたので、それにしました。とにかく意味性を排除したかった。BでもCでもいいやくらいの気持ちです。まあ後で考えたら麻原もAだし、荒木さんもAだし、ああ丁度いいやっていう、その程度です。そう思ってもらっていいです。

2つ目。基本的には、メディアの人たちは現場で僕に対しては全く視線を向けてこないとか、カメラを持っているのに動きが他のメディアの人たちとは違うので、何だかよく分からないやつがいるから、こいつはもう視界に入れないようにしましょうというそういう感じでしたね、ずっと無視されていました。『A2』の後半に、千葉県流山市の市民たちがオウム信者の排

斥を求めて実施した何千人規模のデモのシーンがあります。僕はカメラを手にオウム施設に入って、プロデューサーの安岡は外でデモを撮っていました。現場には二人しかいないから、二人で撮影するしかない。そうしたら安岡が、顔から出血しながら施設に帰ってきた。どうもこいつは他のメディアとは動きとカメラの向きが違う、オウムらしい、って言われてプラカードで殴られたらしいです。要するにこの時期、とにかくオウムの要素はすべて社会から排除しなくては気が済まない、という雰囲気でした。

僕は？ うーん、なんか、圧倒されてましたね、なんか、わあ、集団ってすごいなっていうそういう感じで。別に彼ら市民が悪い人じゃないっていうのは分かっていますし。もうちょっと視線を変えればいいのにな、っていうのはあつて。市民たちで結成したオウムの看視団には、オウムと絶対話すなとか近づくな、みたいなルールができてるんです。多くの地区に行ったけれど、文書はすべて同じ。だから、「試しに話してみたらどうですか。」って言ったら、「話す価値なんかないよ。」って。「いや、でも話したら何か見つかるかもしれないよ。」って聞いたら「あなたオウムの人？」と言われて、「いや僕は違いますけど」みたいな会話をしたことがあつて。やっぱり1か0で分けたいのだろうなっていう。まあそれは楽ですからね、仕方がないけど、うーん。もうちょっと何とかならないかな、っていうふうに思いましたけどね。3つ目なんですか。

山：3つ目はですね、これ最初一成さんに答えてもらいましょうか。善良な人たちが、なぜこういう凶悪な事件を起こしたと思いますか。教祖も善良ですか。

中：麻原さんがどんな人かは私には分かりませんね。京都大学で見たことありましたが、相対して語ったこともないし、メディアでも判断する情報がない。これなんでかという、最大の原因は裁判が途中で打ち切られたからですよ、森さんも書き、語り続けてこられましたけど、公判を通じて彼は精神が崩壊します。詐病と言う説もありますけど、私は幾つかの情報総合すれば彼は完全に破綻していたと思う。その壊れた状態のまま、彼は2018年に縊り殺されてしまった。結局、最後まで彼にちゃんと喋らせないまま殺してしまった。彼の指示であることの根拠とされているのは、井上さんのリムジン謀議ですけど、それだけ

です。犯罪、特にカルト集団の犯罪なわけです。社会的産物なのに「なぜ」を殺してしまった。再発防止に不可欠なのは「なぜ」を問うことです。刑事裁判は、社会生活ではやってはいけないことをやった者を訴追し、検事や裁判官がそれは駄目なのだと教え、ペナルティーを与えるコミュニケーション制度であると同時に、公判廷での調べを通じて明らかにした犯罪の原因、背景を社会に投げ返し、社会をより良くする制度のはずなのに、結局、殺して良しとした。最悪の形です、犯罪的と言ってもいい。

山：森さんそのままもう1つ。先ほど善良な人たち、普通で善良な人たちだから人を殺したっていうふうにおっしゃったってことなんですけど、じゃあ何ですかってことですね、あの事件。

森：1つじゃないですね。1つはさっき言いました宗教の持つ負のメカニズム。だから宗教はそもそも、反社会的で危険な存在です。ナザレのイエスの奇跡がシンボリックに示すように、現世の世俗的な概念や価値観と宗教は時に相反します。イスラムも仏教もそうですね。新しい価値観を提示するってことは、今の価値観を否定することになるわけで。同時に死と生の転換、死の方が価値を持ってしまう。イスラム、ムスリムたちは、ジハードでもいいし自爆テロでもいいけれど、なぜ自分の命をあつさり捨てられるのか。天国に行けるからです。コーランにはそう解釈できる記述があります。これはかつて、靖国（神社）で会おうと言って死んでいった日本の神風特攻隊員も同じです。でもね、ムスリムの戦士や特攻隊員たちがみな本気で、そう覚悟していたと僕は思わない。ただしこの状況になると、人は全体に逆らえなくなる。だから危険なんです。

でも今の既存宗教は、特にキリスト教と仏教は、長い年月の間に、そうした要素をラッピングして内側に閉じ込めてきた。なくならないですよ。なくしたら宗教ではなくなる。でも閉じ込めてきた。ところがオウムは、そこを剥き出しにしてしまった。事件当時、日本のほとんどの宗教は沈黙しました。下手なこと言えないって感じでね。それが1つですね。

あとは、オウムの特異性という意味では、用語としてはマハムドラー、サンスクリット語です。専門的すぎますね。要するに、全てが試練であり修行であるという教義です。これはそもそもオウム独自じゃなく

て、彼らが1つの手本にしたチベット密教の中にある教えなんだけれど。師が自分を試しているというメカニズム。これがマハムドラー。これにはまってしまうと、何が起きててもマハムドラーなんです。より逆境になればなるほど、より理不尽になればなるほど、自分は試されてると思ってしまう。そういう精神構図に入ってしまうので、これは相当に厄介だな、って思いました。

他にもたくさん要素があります。あとね、なんといっても大きいのが、麻原の目が見えなかったこと。麻原ほとんど盲目状態でした。つまり、彼はメディアを利用できないんです。新聞は読めないしテレビも観れないんです。じゃあどうしたか。側近たちがメディアになった。一成さんがリムジン謀議について言及した井上嘉浩とか、刺殺された村井秀夫とか、他にも多くの側近たちが、いろんな情報を麻原にあげるわけです。メディアの代わりに。そのときに麻原が最も強く反応する情報は、フリーメイソンがオウムを狙っているとか自衛隊が集結しているとか、オウムの危機と外敵の脅威です。

これもキリスト教がいちばん典型だけど、迫害は初期の宗教にとっては大きな滋養になります。麻原も強く反応した。そうした情報を報告する側近は評価され、競争原理も過熱した。こうして麻原の危機意識はさらに肥大する。

これってさっき言いました、今の社会とメディアの関係と同じなんです。メディアはどんどん不安や恐怖を煽る、それによって社会全般が、中国がいかに危険か、ロシアがいつ攻めてくるか、北朝鮮のミサイルがいつ降ってくるか、そういう意識ばかりになってしまう。同じことがオウムの中でも、麻原が目が見えないがゆえに、側近たちがメディアになって同じことをやっていた。で、その結果として麻原は、そこまでののであればこちらももう自衛するしかないと考える。言ってみれば敵基地攻撃です、先に攻撃するしかないのかと。そこまで追い詰められてしまったとかね。

まだたくさんあります、あるはずですが。でも僕も麻原に会ってないし、一成さんも言いました。麻原の裁判は、彼が精神的に崩壊したのに詐病だと判断されて、一審だけで終わっています。戦後最大の事件で、最もキーパーソンの裁判が、二審も三審もない。おかしいですよ。でも誰もおかしいって言わない。早く吊るせ、早くこんなやつ死刑にしろと。そうした声にメ

ディアも司法も従属してしまっただと、僕は思っています。

山：一成さん何かありますか？

中：麻原さんの主任だった安田好弘弁護士も逮捕されちゃいましたからね。

それからメディアの墮落という話が何度か出ましたが、私は1994年秋から新聞社で働き始めました。松本サリン事件の直後で、翌年3月には地下鉄サリン事件が起きてます。その時はいわゆる「トロッコ」で手足的な仕事ばかりでしたけど、森さんが、「ポストオウム」と言ってる幾つかの事件の中で、神戸の連続児童殺傷事件と和歌山のカレー事件の取材には取材班の一員として現場にどっぷりと漬かりました。そこでやっぱりメディアが完全に壊れていく様は強く実感しました。

1つ言えば、別件逮捕の横行です。オウム信者がカッターを持っていたとか、レンタルビデオを延滞したとかで逮捕した無茶苦茶な捜査がその一つの起源ですけど、オウムを経てメディアに別件逮捕への抵抗感がなくなった。たとえば和歌山のカレー事件です。ご存知の方、ほとんどおられないかもしれないですけども、和歌山市のある地区で、夏祭りのカレーにヒ素が入れられて4名が亡くなった、という事件です。これ証拠が出ないので、別件で逮捕したんです。捜査対象の筆頭にされていた人は、シロアリ駆除の仕事をしていました。それで仕事で使うヒ素を自分たちで飲んで、巨額の保険金を詐取していた。その保険金詐欺で逮捕したんです。堂々たる別件逮捕でした。保険金詐欺の件は各社知ってたんですけど、それを突破口にするという方針を朝日新聞が一面トップで書いた。そしてそれが新聞協会賞をとった。言い換えれば1年で1番優れた報道として評価された。捜査手法としては卑怯な手段だし、別件逮捕を繰り返して自供を迫る手法は冤罪の温床です。なのにオウムを経て、カレー事件ではそういう状態になった。

カレーも別件で幾度も逮捕しました。その拳句に本件の殺人容疑で逮捕したわけですけど、逮捕後の記者会見で、当時の幹事社だったNHKの記者が、会見開始の挨拶で、あろうことか捜査員に「お疲れ様でした」って言ったんです。権力監視でなくて、別件逮捕を繰り返しての捜査を労ったんです。その時は問題になって、各社が抗議してNHKに詫びを入れさせまし

た。メディアの矜持を示したのかもしれませんが、私の印象は違いました。各社とも自分達も実は「ご苦労様」と思っていたからこそ、それを口にしてしまったNHKを激しく攻撃したんだと。

映画にある転び攻防もそうですね。いまでも公安捜査では使われていますけど全然メディアにはでない。これ書いてしまったら公安からネタが取れなくなるからですよ。捜査当局への忖度が強まった。

山：ありがとうございます。時間たっぷりあると思ったんですけど、どんどん押してきました。もう1つ大きなテーマというか、質問が多かったのが死刑なんですね。お二人とも死刑反対だっていうのはよく分かったと。私もそうなんですけど。よくお二人とも聞かれると思うんですけど、じゃあ、あの地下鉄サリンでご自身の大切な人が死んだとしても、それでも死刑は反対ですかってという質問が何件か来てるんですけど。どっちからいきますかね。

森：これよく質問されます。あなたの家族がもしも誰かに殺されたとして、あなたはそこに死刑を望まないんですか、って。答えから先に言っちゃうと、分かりません。だってその状態を僕は想定できないです。よくね、被害者の気持ちになれっていう人いるけれど、あなた本当にその気持ちになってるんですかって僕は訊きたい。そうすると、当たり前だよ、ってその人は答えます。ならば言います。なれるはずないです。自分の身内が、愛する人が、妻が、息子が、親が殺された状況を、本当にリアルに頭の中で再現できますか。できるはずがない。だから、そのレベルで語るべきじゃないと僕はまず思っています。

これは前段。次に、リアルな想定はできないけれど、もしもその状況になったなら、僕は復讐したくなるだろうなって思います。死刑を望むか、あるいはできることなら自分の手で殺してやりたいと。まあ絶対思うでしょうね。ぐらいのことは言います。すると言われます、罵声を浴びたこともあります。それはダブルスタンダードじゃないかと、あなた死刑反対って言ってるじゃないかと。

だから答えます、ダブルスタンダードは当たり前です。だってその瞬間、僕は当事者になっています。でも今、僕は非当事者です。非当事者と当事者は違います。当事者である被害者が、加害者を憎むのは当たり前です。殺したいと思ったとしても当然です。でもな

ぜ、社会全般がその思いを共有しなきゃいけないのか。非当事者は違う役割があるのではないか。そう答えます。以上です。

中：ほぼ同じになっちゃうんですけどね。

山：それでもいいです、一成さんの口から。

中：森さんが言ったように、当事者になった時、局面は変わってしまう。「国に殺人の権利は与えない」「『可変の権利』を奪う死刑は絶対悪である」。これが私の死刑に反対する柱で、今後も変わらないと思うけど、当事者になって激情に支配されてしまえば、私の刑、すなわち私刑として本当に仇をとってやろうとか思い、行動するかもしれません。だからこそ、非当事者である今、私自身の死刑廃止の思想を鍛えて、書き語りたいと思います。

私が尊敬してやまない竹中労という怪物のようなルポライターがいますけど、彼が残酷映画規制の時にこう言ったんですよ。情で法とかそういうものを押し流される時が社会が一番危ない時なんだと。私はヘイト規制を進める立場なので、竹中と相いれない部分はありますけど、「理」を語らねばと思っています。

それを思うのはまさに、90年代以降の劣化をリアルに経験してきたからです。オウムとポストオウムの犯罪の数々で、対権力に於いて報道機関が歯止めを失くしていったことは先ほど述べましたが、もう一つ報道機関の劣化は「被害者との同一化」です。「まず被害者の声」の傾向が強まり、加害者を怪物化し、厳罰を求めるパターンが普通になった。それに比して社会の厳罰化傾向は進み、死刑判決も増えました。先ほど刑事司法はコミュニケーション制度と言いましたが、相手を永久追放する死刑はその例外です。換言すれば90年代とは「情」が、積み上げて来た「理」を押し流す時代でもあったと思います。

「情」が「理」を駆逐する契機を、私の守備範囲でもう一つ加えます。2002年9月17日、拉致事件の発覚です。「被害者の正しさ」に一体化した感情の濁流が、現在に繋がっています。「敵」を措定し、「恐怖」「不安」を煽り、「排除」していく。死刑に通じる構造です。この流れがいかにかマイノリティを窒息させているか、「共生」とは程遠い、もっといえば「社会」とも呼べない殺伐とした世界を作っているかを考えるべきだと思います。

山：ありがとうございます。学生さんたちどうですかね。少しはなんとなく分かってきましたかね。分かってほしいんですけど。その上で、1年生なのである意味お二人から見ると、ん？ って思うかもしれないんですけど、でもいくつかある質問なので、あえて投げかけます。オウムの話に戻れば、善良な人たちだからっていう風におっしゃっていた。本気でいいことだと思って人を殺す人もいたろうと。オウムの中はね。でも、ニュースなどで誰でもいいから人を殺してみたかったなんて事件が最近多い。そういう人を見ると自分は凶暴で冷酷な人なんだと思います、と。お二人から見て、そういうような人たちも普通の善良な人たちだという風に見えるんですか、っていう。いろいろな問いが含まれてると思うんですけど、よろしく願います。どっちからでも。

森：誰でもいいから人を殺したかった、時おりありますよね。でも本当にそれを本気でそう言っていたのかどうか、それはまず精査されなければいけないし。1年生のみんなは分からないかな、池田小児童殺害事件の実行犯である宅間守、彼は裁判で、金持ちの子どもたちみんな殺しまくりたかったと証言しています。もっと殺したかったとも言っています。社会の憎しみをさらに煽るように。

これは、ほぼはったりだと僕は思います。法廷でも実はこっそり涙流していたらしいです。それを弁護人が新聞記者に言ったら烈火の如く怒ったという話を、当の弁護人から聞いたりもしてるけど、だからそういう言葉をあんまり額面通り受け取らない方がいいとまずは思います。虚勢張ります、彼らは。

あとね、もう1つあるのは、死刑になりたいって言って人を殺したと、最近増えてますよね。だからこれは死刑があるがゆえに犯罪が起きてるわけで、完全に犯罪抑止に役立ってないと、死刑が。という1つの事例ですね。

残虐で凶暴だから人を殺すという方程式を前提にするならば、ナチスドイツ時代のドイツ国民の多くは残忍で凶暴だったということになります。南京で虐殺した大日本帝国陸軍の兵士たちは、みな残忍だったのか。ウクライナで今、市民を攻撃するロシア兵士はみな凶暴なのか。絶対に違う。みな家に帰れば、良き息子で良き父親であるはずですが、でもそんな人たちが、ある環境が設定されたときに、ナチスのアイヒマンが典型ですが、ありえないほどに残虐な行為に加担して

しまう。悪の根源は、組織や集団のメカニズムです。絶対に個人ではない。

最後に本当に、もう本当にもう人を殺すことがもう好きでしょうがないとか、そういう人がもしいたしたら、僕は会ったことはないけれど、それは壊れてます。それは病気です、サイコパスです。治療しなければいけない。まあサイコパスは治るかどうかわからないけど、少なくとも人間という標準から逸脱してますから、その人を1つのモデルにして人間を語るべきじゃないと僕は思います。

山：さらに、一成さんから聞きたいですね、私は。

中：質問、なんでしたっけ？

山：今のことで、いっぱい人を殺したかったとか、人を殺してみたかったとか、そういう人たちも善良なんですか、って。

中：凶悪犯罪の加害者がその段階において善良な人だとは私は思わないです。ただその状態がいつまで続くわけでは無い、その時々縁に触れてその人の持つ弱い部分が出たということであって、一日24時間その状態ではない。私が死刑反対の理由で言った「可変性」にも通じます。犯罪の多くは社会的産物であり、犯罪に手を染めた人もそうではない存在になる可能性がある。それを今、生で発現できるか否かではなく、デフォルトとして備わっている。だから人は殺してはいけないと思います。もちろん確定的な悪意を持つ者や、他害が楽しくて仕方のない者もいる。娑婆に出せば次の犯罪をすることが目に見える者もいる。そのような人たちは隔離するしかないでしょう。でも殺してはいけない。もっとも不都合な者だからこそ、殺してはいけない。命の選別は人間の手に委ねるものではないし、それは優生思想やレイシズムと容易に結びつくものです。その優生思想やレイシズムは、人道に対する罪を引き起こしてきた思想的資源なのですね。

山：ありがとうございます。最後お二人もう一度「福田村」(の映画制作のこと)とか、最近の(お二人の)新刊も含めてちょっとずつご紹介いただきたいんですけど。最後は、語ることの意味とか、映画を作ることはなんですか、って聞かれて、さっき森さんおっしゃってましたよね。世界は変えられない、でも読ん

だ人、観た人が世界を変えてくれるかもしれない、と。

一成さん、さっきイ・チャンドンの言葉をして、ご自身が書き語るの意味っていうのを言ったと思うんですけど、そういう意味で、最近の新刊本2つについて、それぞれがお話していただきたいな、というふうに思うんですけど。どちらからでも構いません。

森：一番新しい本ですけど、タイトル『千代田区一番一号のラビリンス』(現代書館)って、千代田区一番一号要するに皇居です。主人公は明仁と美智子です。2人の冒険ファンタジーです、2人が黄泉の国に行きます。多分ほぼこれまでなかった本だと思うんですけど、書評が出ません。でも、読んだ人はみんな面白いと言ってくれてるんで、面白かったでしょ？ 山本さんね、うん。最後は本当にね、黄泉の国に行った美智子さんを明仁さんが救出しに行くんです。是非、手にとってください。

中：私の本(『ウトロここで生き、ここで死ぬ』三一書房)は、先ほど紹介した、焼き討ちにあったウトロ地区というところ、1943年に形成された在日朝鮮人集落なんですけど、再開発事業が進んでいまして、2、3年以内に昔からの建物は全て消えて団地になる。そこに住民のほぼ全員が移住する、まさにその渦中なんですけど、その形成前から現在までの70年、80年くらいを追っかけたルポルタージュであります。もうインタビューに応じてくれた半分くらいの人が鬼籍に入っているんですけども、その人たちの人生を残そうと思って書いた本です。読んで、歴史の証人たちの姿を心に刻んでほしいと思います。

それを読むということは、他人の生を体験することです。例えば井伏鱒二の『山椒魚』を読んだら、読者は「山椒魚」になる。そういう経験を何回できるかっていうことが、人を豊かにすることだと思います。一生懸命書きましたんで、よろしければ。

山：お二人ともこんな人相なんですけど、優しいんですよ、語り口は。とてもいいのでもしよろしかったら読んでみてください。

森さん最後、福田村のクラファンは、これは宣伝していいと思いますので、どうぞ。

森：さっきちょっと一成さんも言及してくれた映画ですが、今年撮る映画です。来年公開予定で、タイトル

はまだ仮だけど『福田村事件』。今は千葉県の野田市です。そこにあった村で、関東大震災が9月1日に起きて、朝鮮人が殺される中で、香川県から来た15人の行商団のうち9人が、村の自警団に殺されました。なぜ殺されたのか。言葉が、方言が、こいつは日本人じゃないと。誤解されて、朝鮮人だと誤解されて殺されたわけです。ところが、殺した側も、殺された側も沈黙しちゃった。なぜなら被差別部落なので。だからこれはほとんどもう誰も忘れ去ってしまった事件なんですけど、さっきちょっと話しました。たまたまこれを知って、これは絶対に映画にすべきであると。そう思って今準備をしています。今年の8月20日からクランクイン、撮影始めて、ほぼ1ヶ月で。

さっきも言いましたけど、大手の映画会社やっぱり協力してくれないので、クラウドファンディングで資金を集めてます。普通に作ったら2億かかる映画です。まだ、その3分の1も集まってないので、是非ご協力をよろしくお願いします。

ということと、あとやっぱり、さっき話しちゃったけど、是非この映画を観てください。公開来年だから、来年100年なんです、関東大震災から。だからそれに合わせてこの映画を、負の歴史を、本当に負の歴史から目をそらす日本人に、日本の映画関係者にこの映画をしっかりとおぼつけてやりたいと思っています。よろしくお願いします。

中：キャスティングとかも内緒ですよ。

森：キャスティングまだ内緒にしています。今月下旬、来月頭くらいに発表できると思うんですけど、これくらい言っていかな。今の映画業界でまあ、俳優さんたち、おかしいだろ今の日本映画と思ってる人いっぱいいるんです。そういう人たちが手を挙げてくれました。是非出たいと言ってきて、ちょっとびっくりする人も入ってます。

山：そういうの聞くと、まだ捨てたもんじゃないかもしれないな、って一瞬思いますね。

森：一瞬ね。

山：はい、すぐに絶望に変わりますが。

中：いやそこから。

山：そうですね。イ・チャンドンじゃないですけどね。長い時間お二人を拘束してありがとうございました。拍手をもってまずはこの部を締めたいと思います。ありがとうございました。

松宮朝：森さん中村さんありがとうございました。長時間ですが、実はまだまだ喋り足りないというか、まだまだ語り足りないところがあったと思います。今日ちょっとたまたま出てはいなかったところでもあるんですけど、100年前のお話をされていたんですけど、実はこれ、コロナ禍でものすごく自粛とかですね、いわゆる同調圧力とか、私達のこの2、3年の変化っていうのはまさに、100年前の関東大震災後の様々な問題をもう一度、改めてかなり似たような状況が起きたり、排外主義的なものが起きたり、様々な噂、デマの話がより深刻になったりと。今日の話から100年前の話から、100年前のこと、負の歴史から学ぶということをおっしゃっていましたが、今日そういう示唆を与えていただいたかな、と思っています。

あるいは今日の話では出てこなかった、実は最近起こった色んな問題を考える、例えば、教育福祉学部の学生だったら、相模原の事件、その事件なんかの問題とも関連する議論ですね。こういうことにも、私たちにあらためて目を向けさせると。要は、今の問題を考える時に、どれだけ想像力を働かすことができるのか。お二人の話からですね、その深さと厚みと、そしてある種の当たり前にされてしまったことに対して、もう一度火中の栗を拾うということをお二人おっしゃっていましたが、幻の火中みたいに思ってしまったら、思わされてしまっていることより、もう一度ちょっと疑ってみようところを考えていただけたんじゃないかな、と。そういうところにもものすごく刺激を与えていただいて、あらためて私たち1人1人が考えることができたんじゃないかな、と思います。

もう1点だけ、最後にすごく教育的な話になってしまうんですけど、これだけは是非考えていただいて終わりにしたいと思うんですけど、これは教育の、大学の場でこういう講演会、座談会を開いてものすごく今日よかったかなと思っています。なぜかっていうと、大学の場がですね、最初も申し上げたんですけど、簡単な正義とか、結構薄っぺらな正義で結構語るようになってしまってるんですね。学生に対しても。あるいは学生に対してもそういうのを求めていることがある

かと思います。アクティブラーニングとか、グループワーク万歳みたいな話になっていて、単純な話をすることがあるんですね。そういうようなことをもう一度ちょっと立ち止まって考えるきっかけを与えていただいたということに、本当に深く感謝します。お二人とも本当にありがとうございました。

注

*1 映画監督 *2 ジャーナリスト *3 教育福祉学部教員

1) 本稿の(1)は、『社会福祉学研究』24号(2022年発刊)に掲載。